

ムーンメモリア・ロストノイズ  
九話…その手に要るもの

雨和七瀬

三人は村人たちからの厚意で宿を貸され、数日セヌイ村で休息を取ることにした。椅子や机などは質素なものだったが、寝台の上に乗る掛け布は三つとも色が違い、特産品がふんだんに使われていた。

「ブランカは手を治療するとして……ユノ、腕は平気か？」

「おう、今はなんともない」

ユノはルークに向けて手を握ったり開いたりしてみせた。

「そうか、ならブランカに傷薬を塗ってくれ。俺は報告書を書く」

ルークはそう言うや否や、ユノが「おうよ」と返事をする前に手帳と筆記具を取り出し、今回のデカイム討伐についての報告内容を書き始めた。

ユノはルークが筆を動かし始めたのを見て、鞆をまさぐりだした。そして口の広い瓶を取り出し、小机に置いた。

「さーて、ブランカ。傷薬塗るから手え出しな」

ブランカがユノに言われたとおり赤いままの手の甲を突き出すと、ユノは指に取った傷薬をブランカの手に乗せた。ブランカは反射的に手を引っ込めようとしたがユノがブランカの手を掴む。ブランカもそれ以降はなるべく動かないようにし始めた。

「き、傷薬、しみますね……あう」

「早く治すためには痛くても我慢だぜ、ブランカ」

目に涙をほんの少し浮かべるブランカを元気づけるようにユノは笑顔を見せながら、傷薬を延ばす。しかしブランカは今にも逃げ出したくなっているのを理性で抑えつつも、顔をしかめていた。

「い、痛いですが、ゆっくり、ゆっくりやってくださいい」

ルークはブランカがバタつく様子を、時々視線を上げて眺めては、また視線を戻して、戦闘でのブランカの様子を記す。

稚拙、無謀、安直、そんな言葉が浮かんで、筆を降ろした小さな跡が度々残る。ルークは出会った時と今のブランカの評価を大きく変えざるを得ないことに、眉を寄せた。

（少なくとも今回、彼女はただの少女であり、武器も長い棒が光っているだけだ）

王宮にまで討伐の請願が届いた魔物の一覧を、指でなぞって読み進めると、デカイムよりも凶暴な魔物の名が連なっていた。

「終わったぞ。やっぱあれ効くなあ、もう腫れが引いたもんな」

ユノが魔物一覧を覗き込む。ルークは仰け反り、ユノを手で払う。

「助かる。ブランカ、手はどうだ」

「今も薬でズキズキしてて、もう怪我したくないです……」

ブランカはすっかり肩を落とし、寝台にへなへなと座り込んだ。

「そうか。……なら防具を変えろ。今の服は何も防げない」

ルークは険しい顔でブランカに告げる。ユノも「そうだなあ」と言いにくそうにしながらも頷いた。

「そんなに弱い……」

ブランカは視線を落とし、自らを包む服を見る。

「……」

ルークは、ユノが彼へ視線を向けていることに気付いた。ユノはそれとなく自分の胸当てを指し、ブランカに視線を移す。ルークは元よりそのつもりではあったものの、一つ息をついてから、少し背を丸めたブランカに話しかけた。

「……薬の補充のついでに装備を一式拵える」

「そ、それは申し訳な」

「そうだな！ 戦うなら装備は整えるもんだ！」

ブランカが断ろうとするのをユノが遮り、バシバシとブランカの背を叩く。

「あはは、痛いですよユノさん」

ブランカは困ったように笑ったかと思えば、口をキュツと固く結んだ。

次の日、三人は旅人向けに商売をしている店に訪れた。ルークが先に魔石や薬を見始めたのをよそに、ユノはブランカを連れて店主に話しかけた。

「なあ店主、この子に鎧を着せてやりたいんだ」

椅子に座っていた店主は眼鏡をくい、と上げると、「そうですね」と言いながらブランカの頭の前から足元までパツと見て、ため息を吐いた。

「兵士さん、この子には貴女と違って肉が付いていないから、鎧着せたら動けなくなりますよ」

店主は立ち上がり、鉄の籠手をブランカの腕に付けた。ブランカは腕をバタバタと動かしてみると、すぐに汗が浮かんできた。

「マジか……いやでも、あの槍なら確かに軽くて振るのに力要らなさそうもんな」

ユノはブランカの姿を見て店主の言い分に納得した。

「そうだな、もつと軽いヤツか……」

ユノは自分が士官学校に居た頃に記憶を遡らせるが、実技でも面倒で制服を着たままだったという、まるで参考にならないことを思い出すだけだった。

「……革製のものはいかがでしょう」

ユノが苦い顔をしているのを見かねた店主は、革の籠手を持ってきた。ブランカにまた付けて腕を動かすように促すと、ブランカはさつきよりも軽快に腕をブンブンと振った。

「これならなんとかなりそうです」

ブランカはニコニコと答えたが、店主は少し間をおいて、ブランカに語り掛ける。

「じゃあ胸当てと腰当て、靴も試してもらいましょう」

店主は次々に慣れた手さばきでブランカに革装備一式を重ね着させていく。ブランカは戸惑っていたが、段々と重さに気付き、プルプルと震え始めた。

「さて、これで戦えますか？」

「ムリ、デス」

ブランカは少しだけ飛び跳ねてみたが、着地するときには重さでふらついた。それを、葉や魔石を見終えたルークが支えた。ブランカは「ありがとうございます」と頭を下げるが、ルークはため息を吐いて、店主の方を向く。

「最低限、靴を新調して、籠手を買うのが良さそうだ」

「しかしそれでは胴が守れませんが」

店主は物怖じすることなくルークに進言する。

「出会った時の動きを考えれば、彼女には身軽な方が向いている」

ルークはユノに買う予定の葉や魔石が山盛りに入った籠をユノに預け、靴からいつものように貨幣の入った袋を出し、靴と籠手の分だけを店主に渡した。

「ブランカ、一度村の外で体を動かしてみろ。……店主、またあとで来る」

靴と籠手を試着したままのブランカを手で招き、ルークはブランカを連れて店を後にした。そのまま村の通りを抜け、外の草原で足を止めた。

「ここでやるか」

ルークはそう言うと、靴から本を取り出した。

「ブランカ、構えろ」

ルークは本を開き、魔法の起動準備を始めた。ブランカは首を傾げつつ、武器を両手で持って腰の右側にまで引く。

「お前はデカイム以前にスライム種を知らないから戦えないのだろう。スライムを喚ぶから、安全な間合いでコアを突いてみる。……〈サモラ・モンストル・ハイビスカス・スライム・アクア〉」

ルークが長い詠唱を終えると、空中に魔法陣が浮かび、デカイムの十分の一ほどの大きさのスライムが一体、ほ

とりと落ちてきた。スライムはコアをキョロキョロさせると、一度地面に広がり、地中に染み込んで逃げようとした。しかしルークが手を上へ動かすと、スライムは上へ引つ張られるように飛び上がり、また着地した。

「え？　すごい……じゃなくて！　やってみます！」

ブランカは初めて見た召喚術に驚いていたが、スライムが自分に向かってきているのを見て、自身もスライムのコアを刺すべく、間合いを詰める。

「もう少し長めに持て、弾けた粘液が手に付く」

ルークが手を体へ引き寄せると、スライムがブランカから距離を置く。

「スライムを相手取るなら、中心より手前が良い。……次だ」

ルークはそう言うと、手を握りしめる。するとスライムは表面を振るわせ始めた。

「攻撃を仕掛けさせる。避けてみる」

ルークの言葉にブランカが身構えると、スライムは触腕を伸ばした。右側に伸びてきたのを見て、ブランカは左へと体重を移し、追いかけようとした触腕を払い落とす。

「今はそれでいいが、いずれは互いの間合いよりも遠くまで動けるようになれ」

「はい！」

ルークは厳しい言葉を掛けるが、ブランカは力強く受け入れた。ブランカのまつすくな視線に、ルークは笑みをもって返す。

「じゃあ最初に行った通り、コアを突け」

ブランカは首肯すると、武器を剣のように持ち替え、スライムに近づく。スライムがもう一度攻撃態勢を取ると、ブランカは速度を緩め、左に粘液を飛ばされるのを右前へ大きく飛び、一気に距離を詰める。

「そこだア！」

ブランカがコアめがけて武器を突き刺すと、スライムは攻撃の衝撃で飛び散った。

「うわっ……、あれ？」

ブランカは咄嗟に顔を腕で守ろうとしたが、スライムがかからないのを不思議に思っ目を開けると、眼前に防御魔法によってできた光の壁が展開されていた。

「小型のスライムを勢い良く攻撃すると、粘液が飛び散ることがある。すぐ離れるか、勢いを付けないのが好ましい」

ルークは防御魔法を解呪しながら、ブランカの元に歩み寄る。

「魔物の知識も欠落しているのは失念していたが、知識さえあればよく動けるようになるのが分かった。動きを邪魔しないためにも、今の装備で十分だろう」

ルークは、ブランカにハンカチを差し出す。

「汗を拭いたら店に戻ろう。ユノが待ってる」

「……はい！」

二人は横並びになってスライムとの戦い方を復習しながら、村へと戻っていった。

店に戻ると、ユノが頬を膨らませて待っていた。

「オレのせいじゃないのに、店主に『胴を守らないのは』って、怒られた……」

「なんか申し訳ないです……」

ユノのふくれっ面を見てブランカは頭を下げたが、ルークは腕を組んで、堂々とした態度でユノに向き合う。

「買いた物が済んでいないんだ、店に一人残しておくのが礼儀だろう」

淡々としたルークの語り口に、ユノは更に機嫌を悪くしたのか、口を尖らせた。

「しかも、胸当て腰当てが要らないと来たもんだ！ いやあ先に会計しとけばいいじゃないか！」

ユノはルークから預かった籠を突き返した。ルークはそれを受け取ると、また魔石や魔法道具の棚へと足を運び、魔石を手にとってかごに入れた。

「まだ買うのかよ！」

次の朝、先に目覚めたルークとユノは村を立つ準備をしていた。

「なあ、次ってミニート町だろ？ あんな人が多いところの近くで『異物の魔物』が出たのかよ」

ユノの疑問に対し、ルークは首を横に振った。

「いや、ブランカに持たせる武器を調達しに行く」

ユノは「はあ？」と声を上げたが、ルークに静かにするように促されると、声の大きさを絞りつつ、ルークに疑問を投げかけた。

「いや、今使ってる武器の性能が見たいんじゃないのよ」

ユノは、ルークの返答を静かに待つ。ルークは視線を

落としてつつ、静かに答えた。

「ブランカは一度、我々のよく知る武器を持つべきだ。

中途半端な戦い方じゃ……強力な魔物には対処できない」

デカイムとの戦闘中、ブランカが武器を取り戻そうとした時の表情を思い出して、ルークは眉間に皺を寄せる。それを見てユノは目を丸くし、ルークをじーっと見つめる。

「……何だ」

「いやー、ルークもブランカの事、ちゃんと考えてるんだなあって」

ユノのにやけた顔を見て、ルークは顔を背けた。

「……武器の対照実験も必要だろう」

ルークは顔が熱くなっているのを、手を当てて冷ます。それすらも、ユノにはばっちり見られていた。

「へいへい、そういうことにしとくか。な、ブランカ」  
「!？」

ルークは勢いよく振り返ってブランカの方を見たが、ブランカはユノに頬を指でつつかれながらも、まだ無防備に寝顔を見せていた。

「ユノ……ブランカが寝るのを邪魔するな」

拳を握り締めては緩めるのを繰り返しつつも、精いっぱい声を潜めてユノを咎めると、ユノは「それもそうだな」と指を引つ込めた。それでも起きない様子を、二人は静かに見つめるのだった。

〈十話へ続く〉